

# 智旭『大乘起信論裂網疏』について

——眞諦訳『大乘起信論』の引用について——

篠 田 昌 宜

## 1. 問題の所在

藕益智旭（1559～1655）が五十代後半に實叉難陀訳『大乘起信論』（以下『起信論』と略す）の注釈書として『大乘起信論裂網疏』六卷（以下『裂網疏』と略す）を著述した。智旭以前の人々は眞諦訳『起信論』の注釈書を著述したのに対し、智旭は実叉難陀訳『起信論』の注釈書を著述した。『裂網疏』には、實叉難陀訳（新訳）『起信論』の本文に無い部分を、眞諦訳『起信論』の本文から引用し、補つてから注釈をする箇所や、實叉難陀訳『起信論』の本文だけでは不十分と思われる箇所には「梁云」・「梁本云」という形などで眞諦訳『起信論』の文を引用する。より確かな注釈を目差そうとする反面と、旧訳の『起信論』をテキストにした注釈書が多い状況を無視できなかつたものと思われる。

本稿では、「梁云」・「梁本云」などとして智旭が眞諦訳『起信論』を引用した部分に着目して、實叉難陀訳（新訳）の『起

信論』を注釈していくのか、その一端を考察する。

## 2. 真諦訳『起信論』の引用部分の考察

① 梁の眞諦訳と唐の實叉難陀訳の『大乘起信論』を比較し、實叉難陀訳を優れているとし、しかし古くより既に、梁本の訳が普及しており、無視は出来ない事を述べる。（正大日本統藏經45卷・734c 2～5）

② 作因とは眞諦訳『起信論』では、因縁という。修信は眞諦訳『起信論』では、修行信心、利益は眞諦訳『起信論』では、觀修利益、として、用語を眞諦訳『起信論』と対照させてゆく。作因の箇所で、因縁とは因縁と限定する、湛然が『止觀大意』で説く化他不思議境の言亡慮絶の一念三千という不思議の理法を言語によつて表現する場合、因縁によつて説明した背景があると思われる。表題の『大乘起信論』の「起」の中での、一切諸法は無生無起であることを因縁によつて説き（正大日本統藏經45卷・735b）、修信分（正大日本統

## 智旭『大乘起信論裂網疏』について（篠 田）

藏經45卷・773a)・利益分(正大日本統藏經45卷・779c)の中でも因縁に沿つての説明がなされる。

③ 智旭は佛滅後の自力で仏教の教えを理解する衆生に義持の人と文持の人がいるとする。「少し經を見て多くを理解する人」を義持の人。「廣く諸經をみて理解をする人」を文持の人とする。そして、眞諦訳『起信論』での理解は、「廣く聞いて解を取る T32・575c」とあるように「義持」と「文持」を兼ねたものであり、實叉難陀訳『起信論』による理解は、「少し聞いて多く解する」とあり「義持」であるとする(正大日本統藏經45卷・738c 18~22)。因みに、法藏『義記』では、「廣聞取解」を文義「持」であり、「少聞多解」を義持とし(T44・250a)、子璿『起信論疏筆削記』では、「於少聞而多解者。」二則如疏具文義「持。T44・324c」とある。

④ 實叉難陀訳『起信論』の「有法」と「法」は、眞諦訳『起信論』の「法」と「義」に相当するとする。仏教の普遍性の根拠を意味する「有法」では所觀の境を「衆生現前介爾の心」であるとし、迷悟の所依であり、十法界を具し、それが眞如そのものであるとし、介爾心を離れた眞如など無いことを示し、仏教の普遍性の意義を意味する「法」では、衆生心である「衆生現前介爾の心」が眞如の體相用と同じであることを、生滅の因縁がそのまま眞實のありかたであり、生滅の因縁をすべて別の心の眞實はないという事を説明する。『裂網疏』の中心テーマと関連する場所で眞諦訳『起信論』が引用がされている。(正大日本統藏經45卷・739a17~18)

⑤ ここでは眞如のあり方にについての説明で、眞諦訳『起信論』が引用される。實叉難陀訳『起信論』の原文と比較してみると、實叉難陀訳『起信論』「非其體性有少可遺有少可立」T32・584c16]・眞諦訳『起信論』「此眞如體無有可遣。以一切法悉皆眞故。亦無可立。以一切法皆同如故。T32・576a17」と眞諦訳『起信論』の下線部当たる部分が實叉難陀訳『起信論』には見られない。眞諦訳『起信論』を引用してくる意味は、この欠けた部分が『裂網疏』で、眞如のあり方を偏空ではなく、眞如のあり方を幻有でないとする理由を説明する為、引いたと思われる。(正大日本統藏經45卷・742c17~18)

⑥ 心生滅門の迷妄の心について説明がされ、心が迷う様子についての釈の中で、實叉難陀訳『起信論』の本文にはない部分を眞諦訳『起信論』から補い、それを本文として加える。『裂網疏』をみると「粗中の細、及び細中の粗、菩薩智の境。細中の細、是れ佛智の境。」(藏中、此の八字を失す。梁本に准じて、補う。)…とあり、實叉難陀訳『起信論』の本文には「粗中の細、及び細中の粗、菩薩智の境。」までしかだが、眞諦訳『起信論』から「細中の細、是れ佛智の境 T32・577c」が補われているのである。これによつて、智旭は心が迷つてゐる様子と、六種の迷いの心を対応させて釈してゆくことを

可能にしたと思われる。(正大日本統藏經45卷・757b21) 法藏

『起信論義記』では「細中之細是佛境界 細中之細者。謂根

本業不相應染。T44・269a」としてある。

⑦ 無明の熏習によりて、迷いが起こるが、迷いの心が無くなる時は、迷いの心の様子が無くなるのであり、心そのものが無くなるだけでなく、それにより人は存在の根拠を失わずにすむことを説明する釈の中で真諦訳『起信論』が引用される。

實叉難陀訳『起信論』「以心體不滅心動相續 T32・586b24」には見られない真諦訳『起信論』「以體不滅心得相續、唯癡滅故心相隨滅非心智滅 T32・578a13」の傍線部を補うとして、四智心を眞如の相大と関連づけ、「迷いの心が無くなるのは迷いの様子が無くなることである」という様子を説明する」とを可能にしたと思われる。(正大日本統藏經45卷・758a14)

⑧ 信分(眞諦訳『起信論』では、修行信心分)において、眞如の三昧により不定聚の衆生が正定聚の境地を成就するわけである。實叉難陀訳『起信論』では、それを一相三昧としている。智旭は心佛衆生三無別だから「一相三昧」とあるとする。

眞諦訳『起信論』ではそれを「一行三昧」ということについて、所證の立場から見れば「一相」であり、能證の立場から見れば「一行」なのとする。智旭は一行とは一相のことで、『文殊般若經』に示す、一行三昧(T8・731a～c)と回じであるとしている。(正大日本統藏經45卷・775c4～9)

### 3. おわりに

八つの例文から考察される」とは、眞諦訳と實叉難陀訳の『起信論』起信論を一つ並べて注釈がなされたと書うことである。(2)と(4)に見られる用語を眞諦訳のものと対照しながら論を進めていたのは、從來の旧訳で『起信論』を理解した読者への配慮と思われる。次に訳經者の違いが智旭の解釈に大きく差が出たのは、(8)で、一行と一相の違いを能證と所證の違いであるとした部分である。この違いが、智旭は性相融会を論じることが出来たのかという判断は今後の課題とする。(3)の文持・義持の記述の仕方や、(6)の六染と心のあり方を結びつける方法は、恐らく法藏などの伝統的な『起信論』の注釈書によっていたものと思われる。(5)や(7)は實叉難陀訳を読み手への一層の理解を促す為に眞諦訳をつけたものと思われる。

〈キーワード〉 智旭、大乗起信論裂網疏、眞諦、實叉難陀  
(駒澤大学大学院研究生)